

# 生き物文化誌学会 えひめ西条例会

「生き物」と「人」との関わりについて幅広く研究している「生き物文化誌学会」例会の会場に県内で初めて西条市が選ばれ、4月24日に総合文化会館で開催されました。

えひめ西条例会は「石鎚山系のけものたち」をテーマに開催され、全国各地から生物学の研究者や学生など約190人が参加し、学会常任理事の秋篠宮さまもご出席されました。例会で行われた、基調講演と研究発表、総合討論の概要をお知らせします。



## 基調講演の概要

### ●海を渡るイノシシ

講師：奈良大学

高橋春成教授

近年、瀬戸内海で島嶼部に渡るイノシシが目撃されるようになり、話題となっている。イノシシが海を渡る背景には、暖冬化や耕作放棄地などの増加に伴う生息数の増加と分布の拡大があり、全国的に狩猟者数が減少していることも関係している。

また、江戸時代の朝鮮通信使供応の御用残りが倉橋島等へ解き放たれたり、大航海時代前後に食料補給のために人によってポリネシア等の島々に持ち込まれ、野生化したブタ

も、広義の「海を渡った」イノシシといえる。

こうしてみると、人とイノシシとの長くて強い関わりをみてとることができる。

## 研究発表の概要

### ●石鎚山系の人とけもの

発表：石鎚ふれあいの里

山本貴仁代表

石鎚山系ではこれまでに40種類の哺乳類が確認されており、そのうちツキノワグマ、ニホンカモシカ、ニホンジカ、イノシシの個体数は江戸時代以降、時代とともに変化したことがうかがえる。

石鎚山系は焼畑が盛んに行われた地域であり、後にスギ・ヒノキの造林地へと移り変わってきた。これらによる生息地の改変に加え、かつて盛んに行われた狩猟も個体数に影響を与えたと考えられる。

ツキノワグマ、ニホンカモシカが絶滅に瀕する一方でイノシシ、ニホンジカは近年増加の傾向がある。

四国は古くから人と獣の関わりが密であった。人が哺乳類に与えた影響を歴史的にたどりつつ、保全管理の手法を研究することで、共存に向けたモデルを示すことができるのではない。

### ●四国のツキノワグマを追って

発表：特定非営利活動法人四国自然史科学研究センター

金澤文吾理事

現在、四国においては剣山山系にツキノワグマが10頭程度生息することが明らかにしているが、絶滅の恐れがある。ツキノワグマの生息に適した環境はブナ林だが、人工林に囲まれた四国のブナ林の面積は、四国のツキノワグマを安定して存続させるには不十分である。その復元・回復の取り組みが求められる。

また、生息環境の保全に関する地域住民の理解と協力も不可欠である。人と森、野生動物との関わりを再考し、人と野生動物が共存できる森づくりを進めることが求められる。

## 総合討論の概要

総合地球環境学研究所の秋道智彌副所長をコーディネーターに迎え、講演・発表者3名と会場の参加者を交えての総合討論が行われました。

ツキノワグマや海を渡るイノシシの生息、狩猟などの人間活動や大雪、温暖化などの自然現象が大型哺乳類の個体数に与えた影響などについて活発な議論が行われました。

特に、なぜイノシシが海を渡るのか、その理由をめぐり議論が深められました。

猟犬に追われたり、食料を求めたりして海を渡りますが、本質的にイノシシが属する偶蹄類は好奇心が旺盛で、対岸が見えていれば泳ぎだすことがあり、好奇心は生き残り戦略であることが示唆されました。

さらに、数あるイノシシ科の仲間のうち「スクローファ」と分類されるイノシシだけが、なぜ家畜になったのか議論され、また、イノシシ除けに「シャガ」という植物を使った珍しい事例などが紹介されました。

このような議論の後、秋道コーディネーターから、歴史、地域、文化を含めて人と野生動物との関係を考えていくうえで、今回の例会は非常に大きな道標となるものであり、大成功であったとの評価が述べられ、総合討論の幕を閉じました。